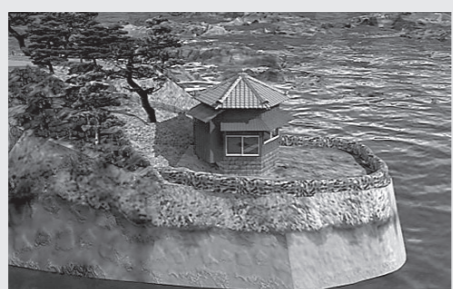


創建時に限りなく近く復元

# 茨城県「五浦六角堂」復興プロジェクト進む

## 流失から13カ月—来る4月17日に竣工式を予定



CGによる六角堂再建イメージ  
※写真とともに茨城大学提供

### ◇「五浦六角堂」

＝明治38(1905)年に岡倉天心の設計によって建てられた。天心の住居敷地の一角、太平洋に張り出した岩盤の上に立つ赤い六角形の建物で、海側の四面(もとは3面といわれる)に中棧のない総ガラスの引き違い窓をめぐらせた三坪の堂は「観瀾亭」と名付けられ、天心はここで思索にふけた。



明治38年当時の六角堂

国の登録有形文化財「五浦六角堂」は、10月初の重要な意見交換会が開かれた。六角堂の復興プロジェクトの第一歩は、6月9月にかけて4回にわたる付近の海底調査から開始された。しかし創建時を偲ばせる柱、梁、桁の類は発見できなかった。調査したダイバーによると沖合は海底が砂地のため潮の流れによって材木類は遠方まで流されたのではないかと推察された。この調査で宝珠、鬼瓦・平瓦・棟瓦、ガラス、水晶(六角柱)などが見つかった。また、7月11日には市、県建築士会と大学との実質的な再建合同打合せ会議が5回にわたり開催された。流失した六角堂は昭和38年改修されたものだが、天心の偉績顕彰

が、天心が明治38年に自ら設計建築した当時の姿とはだいぶ異なっていたことが判明していた。しかし、創建時の設計図や資料などは皆無に近かった。再建の基本方針は、創建当初の復元を目指すことだ。証言・資料の収集、時代考証、技術の検証さらには宮大工の棟梁や瓦製造者などの協力もえて再建計画は綿密にまとめ上げられた。その結果、棧瓦は8寸幅、南側の出窓は当初の姿に戻す、内部中央の六角形の炉を再現、建物の彩色は当時のベンガラ彩色を再現、土台の分析から当初の外観を復元すること、などとされた。

昨年11月、肝心の建築立木(原木)の調査・伐採の段階となり、幹廻り254cm、樹齢150年の立派な太郎杉が選ばれた。工事契約後の11月21日、六角堂再建起工式が流失現場跡地で行われた。式には茨城大はじめ設計・施工関係者ら多数が参列した。2月初旬現在、生コン打ち、組み立て建設と作業は急ぎ進行中だが、当初予定の3月末の完成は難しそうだ。六角堂復興の見通しは立ったが、ほかに天心邸なども被災した。さらに旧日本美術院研究所の再建計画、さらに復興の記録を残すための記念館建設も視野に入れ、文化財の維持管理に努力していく姿勢である。そのため同復興基金の募集を今しばらく継続し、広く義援金を募る方針だ。

問合せは同大学学術企画部社会連携課地域連携係 <http://www.ibaraki.ac.jp/> 参照のしる。

大地震、それに伴う大津波により流失した茨城県「五浦六角堂」、3月11日からまもなく1年。六角堂周辺の五浦地区全体の復興こそが、「東日本大震災」復興のシンボルだとして、「天心・六角堂復興プロジェクト」が管理運営する茨城大学を中心に進められてきた。当初の基金設立から海底調査・再建会議・立木の伐採、工事起工式を経て、再建は順調に運ばれて1年余り、来る4月17日、関係者らが集まり、復興なった六角堂の竣工式が執り行われる予定だ。

同大の「岡倉天心記念六角堂等復興基金」には、国の内外の多方面から多くの寄付金が寄せられ、六角堂復興の見通しは立ったが、ほかに天心邸なども被災した。さらに旧日本美術院研究所の再建計画、さらに復興の記録を残すための記念館建設も視野に入れ、文化財の維持管理に努力していく姿勢である。そのため同復興基金の募集を今しばらく継続し、広く義援金を募る方針だ。